

宣教師ニコライの伝記研究

-中間的成果の報告-

課題番号 02610227

平成2・3年度科学研究費補助金(一般研究C)

研究成果報告書

平成4年3月

研究代表者 長 縄 光 夫

(横浜国立大学教育学部)

3478581

横浜国立大学

〔はしがき〕

本研究は「ニコライ堂」の創立者としてしられる宣教師ニコライの生涯とその事蹟の総合的な研究を目指すものではあったが、師の活動の広範さに比して、今日まで実証的な研究が殆どなかったことが主たる理由で、定められた2年間の期間をもってしては、所期の目的を果たすことが出来ず、ここに報告する二つの論文を纏めることに止まらざるをえなかった。しかしながら、この間、外務省の外郭団体「国際交流基金」の援助を得て、レニングラード（現在サンクト・ペテルブルグ）の国立中央歴史資料館において、ニコライの宗務院宛報告書や日記、書簡等を参観する機会をもつことができたことにより、次ぎなる研究への足掛かりを作ることが出来たのは、望外の幸運であった。引き続き本研究を深化させ、その完成を期する所存である。

研究組織 研究代表者：長縄光夫（横浜国立大学教育学部）

研究費

		3478581
平成2年度	1,000千円	横浜国立大学
平成3年度	600千円	
計	1,600千円	

研究発表

- (1) 口頭発表 発表者名：長縄光夫、テーマ：国際会議「日露間の文化交流1868－1926－日本人のロシア観の源流を訪ねて」主催者：国際文化会館、発表年月日：平成4年5月29日
- (2) 印刷物『ロシア手帖』（「ロシア手帖」の会）33号34号
平成3年12月、平成4年6月（予定）

〔目次〕

明治の正教会—シンポジウムでの発表をもとにして— 4—13

もう一人のマホフ 14—26

明治の正教会

—シンポジウムでの発表をもとにして—

〔1〕

周知のように、キリスト教の各派は明治期の日本の近代化に大きな寄与をなしました。ヨーロッパの文物はキリスト教を一つの、しかも重要な窓口として日本に流入してきたといってもよいと思われます。例えば、カトリック教会を通じてフランス文化が、聖公会を通じてイギリス文化が、プロテスタント各派を通じてアメリカやドイツなど新教各派の国々の文化がという具合です。これと同じことがロシアについても言えるでしょう。

明治において正教会を通じて日本にもたらされたものは、決して宗教だけではありませんでした。ロシアの文学や思想についても、正教会の信徒たちの働きによって紹介された分野が少なくはありません。さらに付け加えれば、いまだ研究されずに残されたままですが、おそらく民衆の日常生活のかかわる様々なもの、例えばサモワールとかクワスとかウォッカとかあるいはルバーシカとか、そういうものも正教会を介して日本に入ってきたのではないのでしょうか。

勿論その逆のケースもありました。その一つにトルストイに老荘の思想を伝えたキエフ神学大学出の正教徒・小西増太郎の例があります。また、ロシア土産として有名な「マトリョーシカ」は小田原の入れ子人形「七福神」を元にしたものだというのが通説ですが、これをロシアにもたらしたのも正教会の関係者ではないかと推測されているのも、このケースの一つに数えることができるでしょう。

確かに明治時代の正教会はそうした多角的な働きをすることが出

来るだけの力量を持っておりました。信者の数に関していえば、明治の中頃、正教会はキリスト教徒全体、約13万人のうち正教会は約20数%にあたる約3万人の信徒を有しておりました。この頃カトリック教会は約6万人、プロスタント各派は合わせて約4万人でありました。これは勿論極めて大雑把な数字ではありますが。

しかるに今日カトリックの信徒は60万と言われ、プロテスタントは40万人と言われているなかで、正教会は何と数千、多く見積もっても1万人の信徒を擁するに過ぎない弱小教団になってしまいました。これは一体どうしてなのか、この原因を考えるのが私の報告の趣旨であります。

一般に次のように考えられております。つまり、ニコライの生前には正教会は隆盛を誇っていたが、1917年のロシア革命によって財政的な基盤を失い、1923年の関東大震災によって布教活動の根拠を失い、さらに第2次世界大戦によって追い打ちを掛けられ、また、戦後は米ソの冷戦の狭間であってソ連の正教会とアメリカの正教会の板挟みにあって教勢は振るわなかったのだ、という理解です。私はこうした理解の仕方を否定するものではありません。しかし、私にはこうした理解のしかたには不十分な側面があるように思われます。つまり、私は教会の衰退の原因はむしろ明治時代そのものの中にこそあったのではないかと考えているのです。言い換えれば、日本の正教会は、たとえ革命や震災がなくとも、早晚衰退を余儀なくされていたのではないかと考えているのです。（勿論今日のような規模での衰退ではないにしても）

{2}

第1に考えられる原因は明治期の日本が、特に民衆レベルでは、

ナショナリズムを主たる潮流とする時代であったということです。そうした時代においては、世界宗教をもって任ずるキリスト教は本質的に異端な思想潮流でありました。ロシアからきたキリスト教徒の集団である正教会もまた、この様な趨勢から自由ではありませんでした。これが正教会を取り囲むマイナス条件の第一であるとかんがえられます。

これはキリスト教が共通に持っていたマイナスの要因ですが、正教会にはもう一つ別のマイナス要因を負わされていました。それはロシアという刻印です。

当時ロシアという国は日本国民一般に対して西欧とは一種特別の印象を与えていました。平均的な日本人がロシアに対して抱いていた感情として次の3つを指摘することが出来るでしょう。第一は脅威感であり、第二は憎悪感であり、第三は侮蔑感であります。

それぞれの感情にはそれぞれの原因があります。第一の脅威感はロシアがその強力な武力によって日本を侵略しようとしているのではないかという猜疑心に由来しています。もっとももうした猜疑心は幕末にはオランダ、明治時代に入ってからにはイギリスやフランスというロシアのライバルから得た情報によって育まれたものではありませんが、それでも近代日本の外交政策の基本にあったのがロシア脅威論であったことは疑いありません。

次に憎悪感はロシアと日本が共に後発的な資本主義国としてライバル同士であったという事情に由来しています。二つの国は中国大陸と朝鮮半島における利権を巡ってサバイバルを賭けた死闘を行わなければならない宿命を担っていたのです。日露戦争とはそうした闘いに決着をつける戦争でありました。

第三の感情－侮蔑感は日本における近代化の質と深く係わっています。近代という時代を西欧中心の時代であることを見抜いた明治時代の知識人たちは、こぞって西ヨーロッパとアメリカに国の将来のあり方を学びました。そうした観点からロシアを見ると、この国は西欧の周辺に位置する半開の国、つまり半ば野蛮な国でありました。この国からは新しい国造りにあたって多くのことは期待されていなかったのです。ロシアを軽視する風潮はこうした歴史認識、世界認識に由来しています。そして、日露戦争におけるロシアの敗北がこうした感情に拍車をかけ、軽視はやがて侮蔑へと転化していったのです。

正教会が布教活動をするにあたり、ロシアに対するこうした国民感情が大きな壁であったことは容易に理解出来るでしょう。

ところで私は先頃レニングラードの国立歴史資料館においてニコライ大主教の伝記研究のための資料収集を行ってまいりました。以下ではその内の一つの資料を用いて今述べてきたことを補強したいと思います。その資料というのは（資番号で言うと[796-176-3449]）1897年に書かれたニコライの宗務院あての報告書です。因みに、1897年という年はニコライ堂の完成からは6年後、日露戦争にとっては7年前のことで、ニコライは当時まだ主教で60歳、そろそろ晩年にさしかかっている頃のことです。

さて、この報告書は布教活動の現状を伝え、宣教師をもう一人早く派遣してくれるう依頼することが主旨なのですが、私がここで紹介するのは彼が正教会の布教活動が他のキリスト教各派に比べて如何に困難な状況にあるかを訴えている部分です。彼はカトリックとプロテスタントの教会が本国からそれぞれ205人、680人の宣

教師を派遣してもらっているのに我が正教会は私一人である、と書き、正教会の劣勢を指摘したあと、次のように書き送っています。

「カトリックとプロテスタントの国々は日本人たちにとって大変な魅力を持っています。というのは今日、日本人たちが急速にそして食欲に吸収しつつある文明の奔流がこれらの国々から流れ出しているのですから。あらゆる類の理論的知識や実用知識あらゆる種類の新機軸や改良品、無数の教師たち—こうしたものがすべてこれらの国々からもたらされているのです。また、当の日本人も列を成して、途切れることなくこれらの国々に出掛けてあらゆることを学んだり、単に旅行したりして畏敬の念を新たにしています。日本人はこれらの国々と商取引を手広く行っています。このような様々な事情がカトリックやプロテスタントの宣教活動を極めて強力に助けいていると考えてもおかしくはないでしょう。

しかるに正教の宣教会にはそうしたことは何一つとしてありません。むしろ外的な事情はここでは正反対です。つまりそれは布教を阻害するような性質のもので、確かに日本とロシアとの友好的な関係は、宗教的な相互関係のほうはさておき、拡大しつつあり、時としてその関係はきわめて誠実で緊密な性格を帯びています。しかし、今のところ日本の民衆は先入観のプリズムを通してロシアを見ており、これらの先入観が正教の布教には全く不利だと申さねばなりません。このことをはっきりさせるためには、絶えず繰り返される一つの事実を指摘するだけで十分でしょう。すなわち、我が教会の伝教者たちは、よほどよく知り合いにならない限り、ほとんどどこでも祖国の敵とか裏切り者よばわりされている、という事実です。

」

ここに紹介した資料はほんの小さな断片ではありますが、私が先に挙げた正教会のマイナス要因を、ニコライ大主教自身が痛感していたことをはっきりと示しているといえるでしょう。当時彼はすでに60歳を越えておりました。日本に来てからはすでに35年が過ぎています。誠に辛い晩年であったと申さねばならなりません。

〔3〕

最後に私は正教会が担っていたマイナス要因として、一つの仮説を掲げたいと思います。それは正教そのものがもつ保守的な性格、反宗教改革（アンチ・リフォーメーション）的な性格です。

ご承知のように、プロテスタントは腐敗したカトリックの僧侶たちによって聖書解釈の正統性が独占されていることに異を唱え、自分たちの良心に照らして聖書を理解しようと致しましたが、その結果、彼らは自分たちの信仰の正しさを自分たち一人一人の良心によって証明するという厳しい倫理的な要請を引き受けることになりました。そして、ウェーバーが教えているように、こうした厳しい倫理的な要請こそが西欧人に自我の確立を促し、その主知主義の精神、合理主義の精神を鍛え、ひいては近代諸科学の振興をもたらし、そしてついには資本主義の成立を結果することになったのでした。

これにたいして正教は、みずから「オーソドックス」と名乗ることからも知られるように、信条の改変を禁じたエフェソス公会議（431年）の原則を厳格に守ることを旨とし、一貫して教父時代以来の聖書理解を堅持してきました。それというのも正教には個人の英知よりも歴史の試練に堪えた伝来の衆知を尊ぶという、人間個人の知性の限界にたいする独自の洞察が根底にあるからだとおもわれま

すが、そのような正教からすれば、聖書理解の正当性を信仰者個人の良心に委ねるというプロテスタンチズムの行き方など、到底容認しうるところではなかったはずで。

近代合理主義が至る所でその弊害を露呈しつつある今日、正教的な人間理解には学ぶべきものが多くあるとは思いますが、しかし近代の幕開けの時代において正教が近代化を促進すエートスとなりえなかったことは明らかです。しかるに明治時代の日本が目指していたのは正に西歐的な意味での近代化であったのでした。つまり正教会は近代日本のめざす方向と根本的にそぐわなかったと言えることが出来るでしょう。

このことは正教会が東北地方という、近代化から取り残された地域に主たる基盤を見いだしていたということと無関係ではないでしょう。

正教会と東北地方との結び付きはその歴史の始まりに遡ります。ニコライがはじめて日本の土を踏んだのは、1861年6月函館でのことでしたが、この地はやがて新政府軍と幕府軍の最後の決戦場となる場所でもあります。そして敗北することになるこの幕府軍に主力として加わった仙台と南部の藩士の中から、ニコライの初期の弟子たちの多くが生まれたのでした。正教会がその伝道活動の根拠を東北地方、特に宮城県と岩手県に見いだしてきたのは、そのような経緯によります。現に今日、正教会が擁する教会50余りの内、18の教会がこの地に集中しているということからも正教会と東北地方の結び付きの強さが分かるでしょう。

しかるに東北地方というのは近代化から大きく取り残された地域であり、近代に入っても幾度となく飢饉に苦しまねばならないほど

の貧しい農業地帯の一つでした。もっとも白河のような繊維工業の栄えた町に正教会が信徒を得ていたという事実はあるにしても、この町の産業も明治の半ばごろには衰退していきました。概して、東北地方には大規模な近代産業が興る基盤がなかったということができでしょう。ということはつまり正教会は将来のブルジョアジーをその信徒とする可能性を持たなかったということの意味しているでしょう。因みに、明治40年（1907年）の時点におけるメソジストの正教会の一人当たりの年間の献金高をあげて見ますと、前者が2円50銭であるのに対して、我が正教会わずかに27銭でありました。こんな数字一つにも正教会の依って立つ社会的基盤の一端を窺うことが出来るのではないのでしょうか。もっとも、教勢が捗々しくなかったのは決して正教会だけではなく、新教各派とても正教会に比較してそれほど目ざましく優勢であったわけではありません。その意味でウェーバー・テーゼを日本にそのままあてはめるのは正しくないという指摘にも、十分な根拠があるといわねばなりません。しかし、各会派が獲得した信徒の数とは別に、社会に対して思想的に影響力を持つ信仰者を輩出したという点では、正教会がプロテスタントやカトリックの教会に大きく遅れをとっていることは、明白な事実でもあります。この事実は正教会がその教義の故に明治という時代が求めていた課題に十分適合していなかったという主張の根拠となりうると思いたいのですが、果していかがなものでしょうか。

以上、私は日本の正教会の衰退の原因は何処にあったか、という問題設定の基づき論を展開したために、勢い、この会派のもつネガティブな側面だけを強調しすぎた嫌いがありますが、こうした指摘

だけに止まっていたには公平さにかけるということは申すまでもありません。。公平にみれば、確かに、少なくとも明治時代においては、正教会がキリスト教の一派としてはかなりの力量を持っていたことは事実であるのですから。

しかし、この時代、正教会はいかにしてこの様な力量を身に付けるに至ったのか、そして正教会はこの力量を何に行使したのかというポジティブな側面についての考察は、今回の報告とは自ずから別の課題であります。先に私はニコライ大主教の日本人の弟子たちの働きの後を辿り、一冊の著作にまとめました。そして今、ニコライ大主教の生涯を描こうとしております。ここに捨象せざるを得なかった問題についてはこの著作の中で考えたいと思っております。

概して言えば、ロシア渡来の宗教を奉じたこの信徒集団の働きのあとは、事実関係としても未だ十分に掘り起こされてはおらず、その意味ではこの分野の研究はほんの緒についたばかりだとすらいえるのが実情ですから、ここに述べた私の論も、本質的には仮説の域をでるものではないことを、告白しておかなくてはなりません。

最後に、もう一つ付け加えて置きたいことがあります。

冒頭で私は正教会が弱小教壇になってしまった、と述べました。このことは事実として間違いではないのですが、それでも若い信徒の中なら聖職者となろうとする者は途切れることなく続き、こうした若い司祭さんを中心として布教活動が活発化し、定期刊行物の数も徐々に増え、従って新しい信徒の数も増えつつあるということも事実であります。カトリックやプロテスタントの諸派とは比べものにならないとはいえ、どうやら正教会にも新しい芽が育ちつつあることも確かなように思われます。こうした喜ばしいニュースをお伝

えして私の報告を終わらせて戴きます。

《ニコライ堂遺聞》

もう一人のマホフ

レニングラード（今様にはサンクト・ペテルスブルグ）国立中央歴史文書館の「宗務院長官房関係文書」一八六〇年の項に「函館の伝道会付き長司祭ワシリイ・マホフを解任し彼に代えて別の司祭を任命する件に関する宗務院長の提案」という長い表題をもった一件書類がある。（念のためその検索用文書番号を記しておく、フォンド文書分類番号七九六、オーピシ目録一覧簿番号一四一、ジェーロー一件書類番号五〇八）

これは紙葉の数にして全部で一四枚と、文書綴りとしてはそれほど大部なものではないが、これこそが「日本のニコライ」誕生の経緯を伝える文書かと思うと、感慨も一入深いものがある。

ここには先ず一八五九年十月二二日付けの長司祭マホフの宗務院宛嘆願書がある。そこでマホフは心臓病の悪化を理由に解任を願い出ている。このままこの地に止まれば「速やかなる死を招来しかねない」ので、早急にペテルブルグに帰り治療に専念することを許可してほしい、というのである。

この嘆願書には当時この地の領事であったゴシケーヴィッチによる口添えの嘆願書も付いている。領事はその中で、彼マホフは一八五八年一月にイルクーツクの教区より当地に着任以来幾度となく心臓の不調を訴えていたが、去る十月一八日には強度の発作があった。医師の言では、この地の湿気の

強い気候は心臓には特に悪く、ここにいるかぎり本復に見込みはないとのことなので、本人の願いを容れて帰国を許してやって欲しい、と書いている。次いで彼は後任の派遣のことにも触れ、この地には専任の聖職者が是非とも必要であり、しかもその聖職者は伝道活動だけではなく学問的な仕事も出来るような人材でなくてはならない、従って必ず神学大学の出身者でなくてはならないということを力説している。それというのも最近まで函館にいたフランスの宣教師は布教というよりは日本の研究に力を注ぎ、日本語や日本の風俗習慣に精通して帰って行ったが、彼のもたらし知識は後任の大きな益をもたらした、という例があるからだという。

これら二通の嘆願書を受け取った宗務院はマホフの解任を認める一方、一八六〇年四月一八日付けでペテルブルグ、モスクワ、キエフ、カザンの神学大学に回状を送り、日本行き希望者を募った。これに対して同年五月二日付けでノヴゴロド・ペテルブルグの府主教が宗務院に返書を寄せている。これはイヴァン・カサトキン、後のニコライの名が初めて現れる記念すべき教会文書である。

「当地の神学大学の最上級生であるイヴァン・カサトキンなる学生が、予め修道の誓いを立てた上で、日本の函館におけるわが国の領事館付きの司祭職に就きたいとの意志を表明いたしております。身上書によれば、学生イヴァン・カサトキンはスモレンスク県ベリスク郡ベリョーザ村の輔祭ドミトリの息子で、当年取って二五歳、一八五七年八月にスモレンスク神学校よりサンクト・ペテルブルグ神学大学に入学し、

目下修行中の身であります、品行すこぶる方正にして學術も優秀、有為の才を顕しております。〔中略〕身上書に見られる如く、学生カサトキンは聖職者の任に就くも修道の道に進むもよく、加えてその才覚はやがて日本人の言語・宗教・風俗・習慣を習得するにあたり彼の助けとなり、ひいては教会に裨益するところ大なるべきことに鑑み、至尊なる宗務院に対して、当学生にカンジダートの称号を与え、若し提出された論文が審査に能く堪え、その名に値するならば、これにマギストルを名乗ることを許した上で、これを修道士として当該の任に就けられますよう、謹んで言上奉ります。」

一読して明らかなように、教会当局は当初ニコライに対して伝道者というよりはむしろ日本学者たることを期待していたのであって、その意味では彼は教会の期待とは別のところでその才腕を発揮したということになるようだ。

その後、彼は修道司祭に任ぜられて名をニコライと改め、六〇年の夏、あるいは秋のある日に日本に向けて出発し、いかなる経路をかってかシベリアを横断、翌六一年六月には函館に着任—かくして日本の正教会の歴史が始まることになるわけだが、しかし、その先のことを書くのがこの小さな文章の目的ではない。

* * *

ニコライが函館についたこの年、同じく函館で『ろしやのいろは』と題する木版刷りの本が出た。縦横それぞれ二三センチと一六センチほどの十葉からなる和綴じの本で、一ページ目にはブロック体のロシア語で「Русскаго Чиновника /

Подарокъ / Японским Детямъ / Русская Азбука / издание
И.Махова. / Хакодате . / 1861 г .」 (「/」は改行を示
す。以下同じ)とあり、各語の上には「ルスンカゴ・チノワ
ンニカ・ポダロコン・ヤポンスンキン・デテンヤムン・ルス
ンカヤ・アズンブカ・イスダニエ・イ・マホウサマ・ハコダ
テ・千八百六十一子」と、ロシア語の読み方が仮名書きさ
れ、更に「オロシヤノサムライハ、ニツポンノ、コドモ、ミ
ナニ、シンモツ ロシアノ、イロハ、」という訳が添えられ
ている。ここでは чиновник (官吏) が「サムライ」と訳され
ていることに注目して置きたい。

二ページ目には山の向こうに日が沈む夕暮れ時(朝日の昇
る景色ともとれるが)、三人の童女が野良で遊ぶ様子を描い
た墨筆書き絵の下に子供向けのメッセージが、これは筆記体
のロシア語で「Любезное дитя / Возьми эту азбуку: уже
/ читать, писать тоже и го/ворить порусски / Ив.
Маховъ」と書かれ、これにも「カシコイ、コドモ、トツテ、
コレハ、イロハ、マナンテ、ヨム、カク、カツマタ、イフ、
ヲロシヤノ、コトバニ、いわん、ま不王」と、いかにも怪し
げな日本語訳がついている。

三ページから七ページまで、ブロック体と筆記体の大文字
と小文字に日本語の発音が「日本同字」と称されて書き添え
られているのが続く。以下、順次紹介しておく、А-ア、Б-
バ、В-ワ、Г-ガ、Д-ダ、Е-エ、Ж-ヂンエ、З-ゼ、И-イ、І-
イ、К-キ、Л-レンエ、М-ミ、Н-ニ、О-ヲ、П-ポ、Р-ロ、С-ソ、
Т-ト、У-ウ、Ф-フ、Х-ハ、Ц-チツンエ、Ч-チャ、Ш-シニア

,Ш-シンチンア,Ъ- 吞 ,Ы-イキ,Ь- 吞、 -エ、 Э- エ ,Ю-ユ,
Я- ヤ, Ө-へ,Й- イーとなる。工夫の跡は随所に見られる
が、特に苦勞が忍ばれるのは硬子音と軟子音に「吞」の字を
当てている箇所だろう。つまり、単独では固有の音を持たな
いということ、を、「音を吞む」と説明したわけだ。今から見
れば得体の知れない表記がかなりあるが、これら表記がこの
時代のこの地方の人々の発音とは合致していたとすれば、こ
の冊子は本来の志とは別に、例えば方言学者や音韻学者に恰
好の研究素材を提供することになるのではないだろうか。

ページを少し飛ばす。

十ページ目からは子音字母と母音字母の組み合わせ（「作
字」）とそれをもとにした約八〇語からなる単語のリストが
一八ページまで続く。そこにはБаба, Мама, など子供向けの日
常的な言葉のほかに、Государство（国）やИмператор（
帝）、そして最後にはПротивоположность などというかなり
難解な言葉まで収録されているのが注意を引く。ひょっとし
て編者は子供ばかりか、インテリ層にもロシア語を教えよう
としていたのかも知れない。（ちなみに最後の語には〔向〕
という訳語が当てられている）

最後の二ページには簡単な会話文が十例見える。ここでは
原文を引用するという煩雑さは避け、訳文だけを紹介おくに
とどめるが、原文の察しをつけるのも一興だろう。

「コンニチハ ハナハダ ヨシ テンキ」

「サクジツ キタ ココヘ ロシアノ フネ」

「ミョウニチ ヲホキ イワヒ」（大祭のこと）

「アノ デシ ツトメノ ツトメハ ヲ ガクモン ハナ
ハダ ホマレニ 譽」(これは分からないだろう。正解は
—Он, ученик, прилежный; а прилежание к наукам очень
похвально. である。〔表記は現代風に直してある〕)

「ゴキゲンヨク 御機嫌能」

「今日吉日をふいとの」(仮名に当たる部分はМилостивый
Государь)

「アナタ ココロヨシカ 何方心善」

「難有 健者」(前の問に対する答え)

「サヨウナラ 左様成」

「ヲイトマゴイ 御暇乞」

最後の文章の下には、「奥州箱館住 常木重吉工」と彫ま
れ、脇に二枚の花を付けた桜の小枝が彫り添えられている。

これがこの冊子の全てである。

手元にあるのは勿論オリジナルではなく、昭和四七年に函
館ででた復刻版であるが、それには函館市長の名前でこの本
についての解題が付いており、そこには次のように書かれて
いる。「本書『ロシヤノイロハ』は、その時(初代領事ゴシ
ケーヴィッチ来日した時のこと—引用者注)同行した宣教師
の司祭イワン・マホフが、日本の子供のために最初のロシア
語入門書として一八六一年(万延二年)箱館で、自費をもっ
て五〇〇部出版したものです。」

さて、ここで疑問がわく。第一に文書館の書類によれば、
司祭の名前は「ワシリイ」のはずだし、第二に司祭マホフは
六十年には帰国しているはずだ。では六十一年になお函館に

いて右の冊子を編んだ自称「ヨロシヤノサムライ」イヴァン・マホフとは一体何者なのであろうか。

* * *

イヴァン・マホフをワシリイの義理の息子（女婿）とする説がある。私はこの説を牛丸康夫神父によって書かれた『日本正教史』（日本ハリストス正教会教団府主教庁発行、昭和五三年、一〇—一—ページ）によって知ったのだが、この説の出所は、神父の亡き今となっては確かめようもない。だが、文書館の資料「マホフを函館の領事館内教会付き読経者の任から解く件、並びに彼及び同教会勤務長司祭マホフにロシア帰国用の費用を支給する件に関する宗務院長の提案」（文書分類番号七九六、目録一覧簿番号一四一、一八六〇年、一件書類番号二五二二）に依る限り、二人のマホフの間に娘あるいは妻らしき女性の影はない。むしろ、この文書中の記述の中に「父マホフ」という表現があることや（二葉目表）また、神父の著書の中でも、根拠は明らかではないながらも、イヴァンの父称を「ワシーリエヴィッチ」としていること（前出『日本正教史』一〇ページ）などから推しても、両者は実の父子であると考えたほうが自然と思われる。しかし、それでもなお義理の関係である可能性は否定できない以上、断定は避けざるをえないのだが、しかしここでは記述の煩雑さを嫌うという理由もあって、蓋然性の高いほうに従い、実の父子という解釈によって記すことにしたい。

文書によって見ると、自称「ヨロシヤノサムライ」イヴ

ァン・マホフは、ペテルブルグの外務省アジア局に勤務する九等文官—つまり、ゴゴリが『外套』の中で「アカーキイ・アカーキエヴィッチ」なる人物を作り出して以来、惨めで無力な下級官吏の代名詞として連想されるにいたっている、あの九等文官であったが、父が函館に赴任したのを受けて、彼自身の願いによるものか、あるいは自ら志願してかは定かではないが、父の函館行きが決定してから約半年後の一八五八年七月（露暦、以下同じ）、父マホフを助ける読経者として、父の任地に派遣されることが決まった。函館へは、何月かは不詳だが、とにかく一八五九年には着任している。しかし、父が帰国願いを出したの遅れること約半年、彼イヴァンも「胸の病」を理由に帰国願いを出した。冒頭にあげた一件書類は、この請願の処理に係わる文書綴りである。

綴りの最初の書類は海軍省主幹（ウブラヴリャーユシイ）から宗務院長にあてた公文書（一八六〇年一二月一〇日付け）で、内容はマホフ父子の帰国費用の出所に関するものである。それによれば、両人の赴任にあたっての公用旅費とその後の給料は海軍省が支弁してきたのだが、この度の帰国願いに関して、本来ならば帰国にあたっての旅費と給料を貰えるのはプリアムールスキイ地区に五年勤めた者だけではあるけれど、この場合、二人は自分の希望に依ってではなく、勤務上で得た病によって解任を申し出ているのであるから、願いを容れて赴任するにあたり支給されたのと同額の旅費（ペテルブルグからニコラエフスクま

で)と半年分の給料併せて三〇九七ルーブル七四コペイカを支払うのが妥当の思うのだが、貴院のお考えはどうかと、宗務院側に費用の負担を求めているのである。(二葉目表—三葉目裏)

これに対して宗務院側は同月三十一日付きの文書で、趣旨には賛成だが当院としては支払いに応ずるだけの余裕がない、との理由から、海軍省の申し出でを断っている。(四葉表—五葉裏)

この決定が翌年の一月二三日にも確認されているところをみると、海軍省と宗務院との間で押し問答があったものと推測される。(六葉目)

こうしたやり取りを見ると、父のマホフは六〇年七月に帰国したと言われている(前出『正教史』一一ページ)のは実は誤りで、解任の許可はおり、後任としてニコライ・カサトキン(後のニコライ大主教)の赴任が決まった後も暫くは足止めを食っていたらしいということがわかるのだが、では「もう一人のマホフ」の方はどうなったのか。些か入り組んだ事の顛末は、イヴァンが六二年五月三日付けで宗務院に当てた嘆願書によって辿ってみよう。

* * *

そもそも彼を読経者として函館へ派遣することを決定したのは宗務院であったが、給料の支払いは海軍省が受け持つことになり、彼は一八五八年七月二〇日に現に給料を同省より支給され、併せて旅費も受け取り、他方外国旅券は外務省アジア局より支給され、五九年には無事任地に着

いた。しかるに、在任中に病に冒され「声を失った」ため、一八六〇年八月一八日付けの報告によって領事・ゴシケーヴィッチに実情を説明し、ペテルブルグへの帰還を願い出た。これを受けて領事はこのことを、医者 of 診断書をつけて、外務省アジア局に報告した。しかし、その後一年経っても何の決定もなされずにきたのだが、その間にも病は高じてきたので、領事の判断で一八六一年六月八日に函館を発って帰国の途についた。

帰国後、先の宗務院長トルストイ伯爵に問い合わせたところ、イヴァンが領事館付きの読経者という職務に就くことは宗務院の決定に基づくものではあるが、身分上は外務省アジア局に在籍していたはずだという。しかるにアジア局の方では、外務省の事務処理上、彼は函館赴任以来当省に勤務したことにはなっていないというのだ。他方、これまで給料を支払ってくれていた海軍省は、彼がペテルブルグへ帰還途中に支給を打ち切ってしまったのである。しかも両省とも責任を互いに回避し合っているために、結局彼はどこからも給料を貰えず、従って生計の目処も立たず、また、勤務上の功勞に対する褒賞も貰えず、これから何処かの他の省庁に勤務するにも前任省庁の推挙状も貰えないという、八方塞がりの状態に置かれてしまったのであった。

そこで彼は改めて宗務院に問うのである－1) 私の函館赴任は貴院の命令によるのですからおうかがいするのですが、私の日本滞在時の勤務は、政府の決定による役人として勤務という資格によっているのでしょうか（私としては

そのように確信しておりました。ましてや、私の推挙状をもとにして作成された職歴表を、貴院は外務大臣閣下宛に送付されたのですからなおのことです。それとも私の函館派遣は勤務という資格によらない、お雇いとでもいった個人的な仕事であったのでしょうか。2) 私は何処から推挙状を貰ったらよいのでしょうか。3) 私の現在の身分はどうなっているのでしょうか。(八葉目裏-九葉目表参照)

これは極めてささやかな「事件」ではあるが、ここから知られることは決して小さくはない。何よりも、宣教という仕事が宗務院と外務省と海軍省の三位一体となった連携によって行われていた、という事実が炙りだされてことが重要な点だ。ロシアの半官半民の海運会社「義勇艦隊」が設立されたのは一八七八年のとであるから、それ以前のロシア人の国外への往来が海軍省の掌握するところであったことは分かるとしても、一介の聖職者やその補助者の旅費はおろか給料まで海軍省が支払っていたとは、一体いかなる趣旨に基づくものなのか、私の狭い知見を以てしては測りかねる。識者のご教示をお願いしたいところである。

それにしても、本来三位一体たるべき三つの省庁の責任体制の狭間に落ち込んでしまうとは、我が九等文官氏は何という不運であろうか。

なお、この訴状の中では父ワシリイのことが全く触れられていないのは、こちらは既に別ルートで先に帰国したということなのであろう。

* * *

マホフはこの嘆願書に添えて、函館における自らの業績についても述べている。

「一八五九年に函館赴任以来、私は日・中語〔ヤボンスコ・キタイスキイ・ヤズィク、日本語と中国語という意味か〕を学び、領事の秘書として働きました。一八六〇年には、教会と領事館員の住まいの建設にあたり、木の切り出しや作業員の督励などに尽力しました。函館で自費で魯日教本を四〇〇部作り、一八六一年の年頭にあたり、日本の子供たちや大人に無料で配りました。〔これが前回紹介した『ろしやのいろは』のことである＝引用者注〕その結果、日本人たちがロシア語を好んで勉強するようになりました。ゴシケーヴィッチ領事はこれを一部アジア局に送りましたが、これについての褒賞の沙汰は今もってありません。私マホフは日本の興味深い年代記をロシア語に翻訳して注をつけ、日本の略地図と統計を作成し、日本島〔単数〕の地図をロシア語に訳し、日本人のために『ポケット・ロシア・日本・中国語辞典』を書き上げました。（この原稿は帝国科学アカデミイの閲覧に供しました。）また、函館滞在中に日本についての論文を書きました。これらは『海軍省論集』一八六〇年一三号と同一八六一年一、二、一—号、一八六二年一号、『北方の蜜蜂』一八六一年五八、二四七号にそれぞれ掲載されました、云々」（一〇葉目表一裏）

イヴァンがどの程度の日本学者であったのか、興味はつきないが、ここに挙げられている文献私は未だ見ていない

ので、遺憾ながら今それを明らかにすることはできない。
他日の課題としておきたい。

さて、不運な九等文官のその後の運命はいかなるものであったのか。残念ながら手元の資料に欠けたところが多いので、詳らかにすることは出来ないのだが、しかし、一八六二年五月一日付けの宗務院宛の文書の中で同院長が「九等文官マホフの件」の再審義を提案しているから、恐らく彼にとって好ましい方向で解決されたものと思われる—というよりは、そう考えたいではないか。そうでなくては、我が「アカーキイ・アカーキエヴィッチ」氏が余りにも可哀相というものだ。

なお、前後してしまっただが、最後に、父親のマホフ神父は無事に年金生活に入ったということを、ノヴゴロド・ペテルブルグの府主教イシドールの宗務院に宛てた一八六一年九月二八日付けの報告書（文書分類番号七九六、目録一覧簿番号一四二、一件書類番号九八）に基づいて、ご報告しておく。